

1

1
2017

第1期(2017)



暗記の眼

能村 研三

鶏鳴三声

葉の裏に銀を湛へて
朴落葉

度忘れを繕ふための懐手

虎落笛眠りの際を忘れをり

一島の全きを視て鷹渡る

本年は四年。「鶏鳴三声」は天岩戸神話にも登場する朝を告げる鶏の鳴き声で、鶏は夜明けを告げるので、縁起がよい。四年は明るい年回りへの準備の年だと言われている。また四年は「取り込む」につながるから、そこから運氣を取り込める。今年も多くの俳句を志す方々が「沖」の仲間になって、一緒に勉強が出来ることを望んでいる。

昨年を振り返ると、つくづく多忙な一年であったように思う。「沖」の最も大きな行事である十一月に行われた「北陸勉強会」は八十五名の参加を得て大成功裡に終わった。

又、殆どの地方支部へも、出来る限り時間を割いて伺い、多くの会員の方々と親しくお話が出来た。

俳人協会の仕事も、地方への出張講演に加えて、全国大会、俳句大賞のそれぞれの予選、本選、熊本地震の災害対策委員会など多忙を極めた。

素気なき幹に灯せる帰り花

水の面に背捻りの術鯉の飛ぶ

鴨の陣やつちや場裏のオアシスに

大筒のカメラが射りし冬の鳥

何者ぢや鷺^{のすり}は胸を揺らしをり

宰相の毒語が止まぬ神の留守

他にも会長を務める千葉眞俳句作家協会は創設四十五周年を迎え、「千葉俳句大賞」の創設など新規事業にも取り組んだ。こうしたいくつかの外部機関の役職を務めているが、「沖」から選出した役員が私を支えてくれているので心強い。

今の仕事は現役時代よりも忙しさを増しているようで、まずは健康管理を考え、今年はよりしっかりとスケジュール管理をし優先順位を決めて時間配分を考えていきたい。

「沖」は四年後に迫った二〇二〇年の創刊五十周年に向けて、そろそろ準備を始めなければならない。同じ年に開かれる東京オリンピック、パラリンピックも施設整備などその準備が佳境となっているが、私たちの「沖」は結社の歴史を振り返り、これからの俳壇にどのような結社として位置づけられるかを見据えながら、五十周年事業を考えていきたい。それには若い世代の参加が必須で、根気よく若手俳人の育成にも力を注いでいかなければならない。

蒼茫集



音もなく

千田百里

音もなく十一月の扉開く

メイドインジャパンのわたし栗を剥く

「じやあね」北陸勉強会三句とふ便利な言葉日の短か

* 崇高か孤高か加賀の雪吊は

鵜様待つ眉丈の水や山眠る

師碑を訪ふけふ冬潮の遠鳴りに

子等の地図

成宮紀代子

* 近道は子等の地図なり花八つ手

柿百顆昭和の頃の夕日負ひ

丸窓に司書の灯くもる無月かな

お麩和に効かす十夜の鬼からし

乳母車に魔女の児のあるハロウィン
鵜様宿の振舞ひ菓子や冬うらら

中能登

楠原幹子

奔放に湧く山霧のラプソディー

児の髪に日向の匂うめもどき

* たまご焼ほどの幸せ冬ぬくし

中能登の稀の日和やくわりんの実

冬銀河耳を澄ませば心澄み

人生の第五楽章日向ぼこ

鱚雲

頓所友枝

鱚雲見上げる度に励まされ

子の逝くや捲る頁を冬にして

不惑にもならずに逝けり木の葉雨
* 初時雨ボク治りますかの文字消えず
山茶花や子の話みな過去形に
喪中なりただただ歩く冬日中

何か寄せ来る 内山照久

芒原ひかり集めてゐたりけり
坪庭に小春一枚置かれけり
* 省略か余白か一面枯野原
いつまでの俺とお前や根深汁
幕閉ちは華やかにこそ冬夕焼
ひたひたと何か寄せ来る十二月

守部 小松誠一

来し方を凡そ諾ひ十三夜
柚子の疵風体どうと言はれても
蔵鋒の大書に見惚る文化の日
割勘の頃の懐かしおでん酒

* 拾はるる事の幸せ朴落葉
先師句碑守部のごとく石路の花

紐鏡 矢崎すみ子

* ひらがなの国を平らに鳥渡る
等高線氣流に乗つて鷹柱
猪独活の花遠澄める百名山
生絹吹く色なき風や糸都の湖
雀蛤となる時水の音
散りそむるもみぢ「てにをは紐鏡」

鮎落ちて 林昭太郎

石榴割れ男の黙の始まりぬ
木犀は香り包丁よく切れる
月光に触れて飛びたる蓮の実
鮎落ちて星座しづかに巡りだす
* 漆黒北陸勉強会司は時雨待つ色能登瓦
墨壺の糸のぴしりと冬に入る

上 京

森岡正作

今朝の冬言葉鋭き批評読む

* 上京の機を逸したる海鼠かな

言葉などなくて燈火の親しけれ

張力の限界までの熟柿かな

親類の親類が増ゆ赤とんぼ

一徹の気性のままに冬耕す

スーパームーン

大畑善昭

銀杏散るスーパームーンに光り合ひ

その輪禍秋の逢魔が時のこと

いまは亡き莫逆の友枯山河

* 鉛筆の硬きを削り憂国忌

水漬やペンのインクも切れてをり

蓑虫の見事な蓑を着てをりぬ

自画像

安居正浩

靴紐の解けてしばらく秋の風

東京に夢ありし日や菊脛

日向ぼこ忘れ上手になりにけり

秋の暮小魚売りはりヤカーで

* 不安とは花野をよぎる雲の影

自画像の皺深くなる冬はじめ

未 来

荒井千佐代

おそろしき潮位なりけり風の葛

ひとところ潮目の交じる野分晴

秋簾よりベルデイーのレクイエム

溜飲の下りし蛇より穴に入る

冬やラッパー万の怒りを胸に溜め

* 鰯雲 未来見えなきこと楽し

賜りぬ

辻美奈子

海鳴りの底ひに冬麗の母郷

賜りぬ能登の小春と増穂貝

土までもやさしく鶉様宿小春

* 遙かなる星に水湧く実むらさき

キーボード叩く霜夜の音たてて

海鳴りの豊かに暗し冬に入る

空のまばたき

望月晴美

風に触れ日に触れ紅葉深みゆく
湯に通すだけの一品青すだち
オレンジは幸せな色柿の秋
* 薬草を干して七尾路冬に入る
能登は今日登四郎晴よ冬椿
鳥影は空のまばたき干蒲団

うなり打ち

甲州千草

新米よと置かるる袋下ぶくれ
能登小春鵜家の芯の自在鉤
* 短日や鬼面太鼓のうなり打ち
綿虫や鵜家の壁のみな白し
右利きの右の重心そぞろ寒
小旋風が踝を打つ酉の市

通過

宮内とし子

釣瓶落とし特急電車通過せり
* 芸術に歪みの加減ラフランス

木犀の散り敷く金の道をゆく
名の井戸を覗けばはるか秋の声
抜け殻も木の実も湿る森の径
冬たんぽぽ竹囲ひして休み窯

寒造

広渡敬雄

* 死ぬる迄泳ぐ魚や星月夜
忘れられたやう稲架木とその影と
新陳代謝よき体なり文化の日
猪垣を開けて本家の地所に入る
食痕の檜一本月明り
大梁の反りに鑿あと寒造

鉦叩

鈴木良戈

鉦叩揃ひて夜を深めけり
いま伐りし竹の重さに困惑す
投網うつ光と秋気孕ませて
大いなる色よき甘藷患者より
正装の老の案内菊花展

潮鳴集



紺たしか

佐久間由子

酒蔵にいのちをからむ蔦紅葉
*高濤に夕日の濡るる神の留守
毬栗の割れて青空ゆるぎなし
この身いま風のひとひら蓮は実
石路咲いて太平洋の紺たしか

文机

高木嘉久

秋冷や針無くなりし体重計
清洲橋に垂線確と冬迫る
地下鉄の微かな温み一の西
*文机を小春の日矢が等分す
銀杏散る思案を終へしやうに散る

水の地図

平松うさぎ

ふゆもみぢ加賀縫箔の能衣装
海鳴りやぐじの鱗の焼きて立つ
*水の地図眼に持ちて鳥渡る
鴨の陣解く指揮棒の羽拡げ
青首を擡げ大根飛び立たず

鷹渡る

石崎和夫

*房総も能登も突端鷹渡る
曙光の露の道標槍ヶ岳
わだつみの波頭真白き鴉日和
遠富士は黄金分割秋の暮
気嵐の奥よりぬつとカッター部

遊び盛りの

板橋 昭子

ぼつぼつと灯して十月桜かな
老人に余力ありけり酔芙蓉
まず供へ夫に語りし梨の出来
* 落葉舞ふ遊び盛りの風が来て
懸大根月の雫も沁みこみて

能登小春

本池 美佐子

耀うて群舞のごとく曼珠沙華
高原の教会の黙秋惜しむ
我が家には我が家の匂ひ小鳥来る
漠みて一穂の煙冬田道
* 句碑それを墓碑とも思ふ能登小春

天高し

多田 ユリ子

台風の近し湯気上ぐ炊飯器
襖絵の砂子のひかり菊の秋
* 天高し何でも出来てしまひさう
取り出ししものに母の香冬支度
冬麗の海をたつぷり能登泊り

地下ばかり

荒井 千瑛子

色鳥来好きなどこだけ読む新聞
ジオラマに荷風の昭和昼の虫
料理書の染みに家族史秋更くる
独唱となりての個性残る虫
* 地下ばかり歩いて重くなるコート

一灯を

阿部 眞佐朗

秋風や内耳に流るボブディラン
平積みの七重八重なす豊の秋
もてなしは遠山に置く冬紅葉
* 一灯を継ぎし鶴家や山眠る
虎の尾を踏みし知事なり霜の華

象 舎

齊 藤 實

面白き文具いろいろ文化の日
麴室十一月の湯気の濃し
鷹の目の鋭さ父の眼にありき
* 落葉積む象舎の溝の深きかな
庖丁を研ぎて勤労感謝の日

『輪中の空』(自選二十句)

七種 年男

モンローの黒子たとへばさくらんぼ
ぜんまいの宇宙時間でゆるびけり
枯蔓引きこの星すこし回しけり
ことごとく実の落ちてニュートンの秋
白萩やこころの折れは音のせず
どんどの火輪中の空をつらぬけり
老人と蛍の里になりにけり
老いてゆくことには慣れず冬帽子
人日や嬰に大きな注射針

融点のあるごと牡丹散りにけり
木洩れ日のダンスホールとなる泉
魂のぶつかつて来る金亀子
ラムネのむ喉に断層生まれけり
水中花咲きて眠れぬ花となり
ざわざわの後ひそひその散紅葉
初蝶の予感のごとく過ぎにけり
滝壺に滝の溺れてゐたりけり
秋風の上に麒麟の顎ひとつ
引力のここが真ん中银杏散る
縄跳びの空もいつしよにくぐりけり

『銀河の一滴』(自選二十句)

峰崎 成規

こま結び解けぬ絡みの去年今年
食む風は険きが美味し鯉のぼり
睡蓮の雨滴小さな天を張る
夕焼を擦つて列車は導火線
天網を漏れて勢ふ鰯雲
囀やときめき何時も未然形
かたつむり歩みし距離を殻に巻き
ボールペンしばしノックの秋思かな
乗り降りば駅舎の呼吸若葉風

バーボンの香りを待たせ胡桃割る
詩歌とは揺らぎつ編みつ蜘蛛の糸
天辺に天辺産まる雲の峰
人がゐて人ゐぬ昏さ木下闇
銀河より一滴こぼれ水の星
五カ町の渡御秋天を指し挙ぐる
鴟啼くや余白に韻を生む詩歌
心底の見えぬ海鼠の腹喰らふ
茎立や中也太宰は書架の奥
足と手が出でて戻れぬ蝌蚪の国
走力を溜むる蜥蜴の動かざる

年間十二句

藤代 康明

蟬しぐれ浴びて大地の呼吸とも
人生のロスタイムてふ良夜かな
朴の木の中天極み冬北斗
雄渾の墨の筆致や鷹渡る
断崖の垂氷直槍光りして
そろばんの音の跳ねあげ春灯
灰神楽たちて野焼きの矛納め
能舞台砕動風のうららけし
縄文の丘に虹立つ左近詩碑
噴水の穂先で踊る陽のピエロ
曼珠沙華燃えて近衛師団跡
昼ちちろ真間全山を膨らまし

年間十二句

小林 陽子

紙漉くや簾桁の波の踊り立ち
風冴えて「伊八の波」に海の音
ポインセチアこんな華麗なる嘘を
ジャズピアノノ烈し凧果てにけり
白鳥を見てきし夜のロシアンテイ
白湯のごと沁みるひと言あたたかし
三桎や大人にもある人見知り
じやがたらの花揺れ北の大地ふと
路地裏へ四万六千日の風
翡翠の一閃渡し舟日和
いわし雲宿り宿られ木も人も
糠床の機嫌よろしき豊の秋

沖作品



能村研三選

* 青春を急ぐ自転車秋高し

粧へる山に太古の節理かな

学者来て花野の午後にくづもれる

秋夕焼群羊笛に戻りけり

新米の姫と小町を選び惑ふ

* ひつそりと目立ちてをりぬ冬桜

鯛の湯引きに地酒国なまり

帰り花親子で違ふ家事流儀

黒塀を残せし小路石路の花

無花果を煮つめ母系をたどりをり

* 梅檀の実のさらさらと風に乗り

竹ぼうき置けば降り初む柿紅葉

これでもう満開かしら冬桜

秋深む巨大風車の三枚羽

山国の水の切れ味走り蕎麦

埼玉

須賀ゆかり

千葉

須田 千代

木村 美翠

冬鴉や錆ぶ青銅の大学名

* 古書店の店主ぬうつと小六月

鯉動く時枯蓮の息遣ひ

冬天へ笙の先立つ婚の列

神迎へ水琴窟の悼む音

* 町名は古地図のままに秋祭

靴底も木犀の香をまとひけり

A4に詰める企て秋ともし

決裁の印影斜め秋薊

鷹渡る逡巡の空切り開き

竹幹の高さに秋のかたつむり

白莢の影の揺れみて蔵の壁

袋よりこぼれて青き今年米

残照の長長とある吊し柿

* 唱へては風の中へと秋遍路

神奈川

秋山ユキ子

千葉

稗田 寿明

岡本 秀子